

現代日本語における可能表現の意味分類について

— 実現可能性の在り処を基準に —

一橋大学大学院生
高 恩 淑

1. はじめに

これまで現代日本語の可能表現の意味・用法に関する研究は多く成されてきたが、可能表現の意味とそれを支える構造を結びつけて研究したものは数少ない。本稿では、可能動詞¹を述語とする可能表現の意味・構造的な類型を探り、それらがどのような構造的な特徴によって支えられているかを明らかにする。また、各タイプがどのような「可能」の意味を表わすかについて考察を行なう。

2. 可能表現の意味分類 — 先行研究と本稿の立場

論者によって用語の違いはあるが、一般に現代日本語における可能表現²の意味は大きく2つに分けられる。本稿と本質的に関わる研究だけを挙げると、奥田(1986)の「可能」と「実現」、渋谷(1993)の「潜在系可能」と「実現系可能」、尾上(1998)の「可能」と「意図成就」がそれである。

奥田(1986:208)は、「動作・状態が人あるいは物にそなわっている、ポテンシャルな特性としてとらえられているときには、可能表現の文は可能あるいは不可能を表現しているし、いちいちの、具体的な現象として動作・状態がとらえられているときには、実現あるいは非実現を表現している」と述べている。渋谷(1993:9)は、このような奥田(1986)の考えを踏まえて、「様々な条件によって、ある動作を実現することが、やる(やった)かどうかは別にして、潜在的に可能・不可能である(あった)」ことを表わす可能表現を「潜在系(potential)の可能」とし、「様々な条件によって、ある動作を実現することが可能・不可能である・あった(=実現

¹ 本稿では、便宜上「V-ラレル」を含んで「可能動詞」と称する。

² 渋谷(1993:9)は、可能表現を「人間その他の有情物(ときに非情物)がある動作(状態)を実現することが可能・不可能であること、あるいはあったことを表わす表現形式類を、その形式・意味・構文その他の特徴について総合的にとらえたものである」と考えている。

する・した：実現しない・しなかった)」ことを表わす可能表現を「実現系 (actual) の可能」としている。

一方、尾上 (1998・99) は、「うちのおじいさんは歯が丈夫だから煎餅が食べられる」のような、いわゆる潜在可能文を「可能」として扱い、「よかった！食べられた」「太郎ががんばって首尾よく持ち上げられた」のような、いわゆる実現可能文については「(動作主が) やろうとしてその行為が実現した」ことを表わすため、許容性や萌芽の有無を問題にする「可能」とは別の意味合いを持つものであるとし、「意図成就」と名付けている。

可能表現の表わす意味が截然と二種類に分類できるとは考えにくいですが、本稿では便宜上、可能表現の表わす意味を《潜在可能》と《実現可能》の二つに分けて論を進めていく。渋谷 (1993) の意味分類との相違点は、渋谷 (1993) は、「動作実現を含意するか否か」を意味分類の基準としているが、本稿における意味分類の基準は「現実界における事態実現」を表わすか否かである。また、渋谷 (1993) は、可能表現の意味を「潜在系の可能」と「実現系の可能」に分けてから、可能の条件によって下位分類³しているが、本稿では、まず可能動詞を述語とする可能表現の意味・構造的な類型を立てる。次に、それらを支えている構造的な特徴（主に、動作主の有無と人称、どの意味役割が主題化されるか、従属節と主節の接続関係、副詞等の修飾成分、述語動詞のテンス・アスペクトなど）を明確にすると共に、各タイプがどのような《可能》の意味を表わすかについて考察する。

これにより、どのような場面や条件のもとで二種類の可能表現の意味が表れやすくなり、または相互に近づいていくかが明らかになってくるだろう。

3. 用例採集と分類基準について

3.1 用例採集

『新潮文庫の 100 冊 CD-ROM 版』をテキスト化したもののうち、昭和生まれ作家の昭和戦後の 20 作品（『新源氏物語』と方言を用いている野坂昭如の作品を除いたもの）から用例を抽出した。電子化資料は、次のような文字列検索 (grep) を実行した後、手作業により可能動詞を述語とする可能表現を選別し、2905 例を収集した。

³ 五つに分類している：心情、能力、内的条件、外的条件、外的強制条件（自発）

- i) [えげせせてねべめれ] [そたちてなねぬまぼるれよんっ,]
- ii) (でき|出来)

3.2 分類基準

本稿において、《潜在可能》と《実現可能》の用法を判断する基準は次のようである。

i) 《潜在可能》

: 動作主の動作・状態が現実実現するか否か（実現したか否か）は問題にせず、単に潜在的に存在する実現の可能性だけを言い表す可能表現

ii) 《実現可能》

: 動作主が意図を持って実現を試みた事態の結果が現実界の特定の時間に具体的な姿で表わされる可能表現

基本的に《潜在可能》を言い表す可能表現の文は、事態実現の可能性のみを表現することから、具体的な時間性に欠けていて、現在のテンス、すなわち「スル形」と結びつきやすい性格を持つ。それに対し、《実現可能》を言い表す可能表現の文は、実際に動作主が実現を試みた結果を表わすため、過去のテンス、すなわち「シタ形」と結びつきやすいということが考えられる⁴。

しかし、このような可能表現の表わす意味と述語動詞のテンスとの関連性は否定できないものの、必ずしも述語動詞のテンスが現在の形（スル形）をしているから《潜在可能》を表わし、過去の形（シタ形）が《実現可能》を表わすとは規定できない。なぜなら、述語動詞のテンスが現在の形をしていても、《実現可能》を表わし、過去の形をしていても、《潜在可能》を表わすことがあるからである。次の表は、述語動詞のテンスの形と可能表現の意味がどう結びつくかを明らかにするために、二種類の可能表現

⁴ 小矢野（1979:89）は、可能動詞の過去形の用法について、「ほとんどの場合、基準となる時点において事柄が実現したことを表わす」としている。また、奥田（1986:200）は、「することができる」を述語とする可能表現の意味とテンスとの関わりについて、「することができる」という、語彙的・構文的な手づきをとる可能表現の文が、その現在のかたちにおいては《可能》を表現し、過去のかたちにおいては《実現》を表現している、という一般的な規定は、いまのところくつがえす必要はないだろう。それぞれが対立する意味を実現するときには、特殊な条件が必要である」と説明している。

の例数を挙げたものである。

【表 1】潜在可能と実現可能の用法の割合（括弧内はパーセンテージ）

可能表現の用法	全用例数	肯定と否定	現在の形	過去の形
潜在可能	1114 (38.3)	可能	472	51
		不可能	530	61
実現可能	719 (24.8)	実現	5	192
		非実現	165	357
2つの《可能》の境界例 ⁵	149 (5.1)	/	118	31
判断不明の例 ⁶	77 (2.7)	/	40	37
その他	846 (29.1)	/	355	491
モダリティ化したもの (～と言える, ～ように思える, など)	/		214	258
慣用的なもの(～てもらえますか, しきれない, ずにはいられない, など)	/		85	38
可能か自発か曖昧なもの	/		15	105 ⁷
可能か受身か曖昧なもの	/		41	90
合計	2905 (100)	—	1685	1220

【表 1】からもわかるように、可能表現の表わす意味が述語に表わされるテンスの形と深く結びついていることは否定できないが、必ずしも連動しているとは言い難い。よって、「述語動詞のテンスの形」を基準に可能表現の類型を立てるのには無理があると思われる⁸。

そこで、本稿では「事態実現の可能性がどこにあるか」という点に注目したい。なぜなら、可能表現の表わす意味が《潜在可能》であれ、《実現可能》であれ、動作主が意図を持ってある事態を引き起こそうとした時、それが実現するだけの可能性がどこにあるのかということがまず問題になってくるからである。

⁵「今行けば5時の電車に乗れる」のように個別的な出来事が具体的な未来時に関わっている文や、「今は足を怪我して歩けない」のように一定の時間に限られる動作主の状態を表わす文は、《潜在可能》から《実現可能》へ移行していくタイプとして捉えられる。詳しくは4.2で述べる。

⁶「あれが彼の仕業とは考えられない」のように、動作主の内的情態を表わす文は《潜在可能》か《実現可能》かの判断が難しい。

⁷「～(N, 自動詞)のように感じられた, ～(自動詞)のが感じられた」の形が多い。

⁸ 渋谷(1993:19)は、「実現系可能と潜在系の可能は、もともと意味的に異なるものであるから、(中略)どちらの可能においても、過去を表わすものと現在あるいは未来を表わすものとがあると解釈すべきである」と指摘し、可能表現の表わす意味が述語動詞のテンスの形によって方向付けられるものではないと捉えている。

4. 可能表現の意味・構造的な類型

ここでは、可能表現を「実現可能性の在り処」を問うことで、大きく次の三つに分けて考える（各用例は作例である）。

(i) 実現の可能性が主題化される対象（人やモノ）に恒常的に備わっている可能表現（以下＜恒常的内在型可能＞）

例) 彼は3ヶ国語ができる。／井戸水は飲めない。

(ii) 実現の可能性が主題化される対象ではなく、ある条件に依存している可能表現（以下＜条件型可能＞）

例) 彼はアメリカ育ちだから、英語が話せる。

人間は水がないと生きていけない。

夏になれば国へ帰れる。／車が壊れて迎えに行けない。

(ii) で言う「条件」とは、動作主の意図する事態が成り立つために必要とされる条件で、「ば、と、たら、なら、ても、ては」のような条件的な形を用いる句や節に限らず、原因・理由・逆接なども含むより広い意味での条件表現を用いて具現化される。例えば、「彼は3ヶ国語ができる」という文と「彼はアメリカ育ちだから、英語が話せる」という文は、両者とも主題化される動作主の恒常的な性質を捉えている点で共通しているが、前者の場合、実現の可能性が常に動作主に備わっていて、それを裏付ける要素は構造上現れないのに対し、後者は動作主ではなく文中に与えられる条件に実現の可能性が依存している点で大きく異なる。

(iii) 実現の可能性がどこにあるのかは問題にならず、単に動作主が事態実現を試みた結果だけが差し出される可能表現

（以下＜条件不問型可能＞）

例) 夜遅く、彼女にやっと会えた。／よくあんな高い所に上がったね。

動作主の引き起こす動作実行の結果だけが重んじられるタイプで、実現の可能性がどこにあるかは特に問題にならないため文中に現れず、事態実現の結果のみが述べられる。

以下では、これらがどのような構造的な特徴によって支えられているか、またどのような「可能」の意味を表わすかについて考察していく。

4.1 <恒常的内在型可能>

描かれる対象(動作主, 動作対象, 場所, 相手など)は「ハ」, 「ナラ(バ)」, 「ダッテ」などの取り立て助詞で主題化される。基本的に単文構造, あるいはそれに準ずる構造をとり, 複文では並列節の形で表現されることが多い⁹。

- (1) 太郎は無限に隠し場所を考え出せる¹⁰。靴の中, ツリザオのケースの中, 台所においた牛乳壺の中……。 (太郎物語)
- (2) 東京生活半年足らずの菅野康三郎は思った。いやこの院長先生は人物だ。なんにしても偉い人だ。これでこそあの大病院も経営できるし衆議院議員にもなれるのだ。 (楡家の人びと)
- (3) ≪イカなら, ウニ焼きでも, 煮つけでも, 天ぷらでも何でも使えるんだけどねえ。蛸ばかりは, 使いようがないわね≫
(太郎物語)
- (4) 「ラ・セール」は銀座七丁目にあるナイトクラブで, ピアノの演奏をバックに歌がうたえる, というのを売りものにしてしている店のようだった。 (新橋烏森口青春篇)

用例(3), (4)のように, 非情物(動作対象, 手段, 場所など)が主題に立つ場合, 基本的に動作主は不特定者で, 「誰が」ということは特に問題にならず, 構文上消去される(「この魚は生でも食べられる」類¹¹)。しかし, 非情物が主題に立っても「動作主の実現可能・不可能な能力範囲」を示す文の動作主は, 通常話し手を含む特定者であり, 構文上省略されているだけである。

- (5) 「(私は)麻雀はできませんよ」 (女社長に乾杯!)
- (6) (彼は)車は運転できません, 馬なら乗れるけど。(作例)

過去の形を述語にする<恒常的内在型可能>は, 小説の地の文に多く見られるが, 時を表わす副詞成分を伴わない場合, 現在と切り離された過去

⁹ 「私は不器用だから大工にはなれない」のように, 従属節で表現される可能表現は<条件型可能>の「既定条件文」に属する。詳しくは, 4.2.4を参照されたい。

¹⁰ 本稿では, 動作主に網掛け, 動作主以外の事態参与者に枠囲い, 条件に波線下線, 述語に直線下線を施す。

¹¹ 寺村(1982:259-60)は, このような表現を「受動的可能表現(passive potential)」とし, 受動と繋がっていると捉えている。

における恒常的な特性を表わすのか、それとも現在まで続く特性を捉えているのかが判然としない。

- (7) 萩江を知っている人々は萩江を無愛想な男勝りな女だと言っていたが、実際に会って話してみると、外から見る印象とは随分違っていた。萩江は漢文は勿論だが、茶も華道もさらに和裁までできた。(花埋み)
- (8) しげは昔の「奥」勤めの女中の一人であったが、今は小さく萎びた、かなり狷介な老婆となっていた。言葉使いも乱暴で、以前から子供たちが台所にたむろしていたりすると、「こんなところで邪魔ばかりして。さあ、あっちへ行った、行った！」などと追い立てもした。そして、このしげが主になって作る料理は、病院の賄いのそれにも似て実質的ながら無味乾燥なもので、お世辞にも美味とは言えなかったのである。(楡家の人びと)
- (9) 終日、ぎんは奥の八畳間で過した。部屋では布団が敷きづめだったが、気分の良い時は床の上に起きて過した。部屋からは川上の家と同じように縁越しに庭が眺められた。(花埋み)

このように、＜恒常的内在型可能＞の文構造は、動作主の有無や、どの意味役割が主題化されるかなどによって違ってくるが、いずれも主題の位置にたつ人やモノに恒常的に備わっている「特性」を表わしていて具体的な時間性を持たない点で共通している。つまり、現実界において動作主が実現を試みた個別的な出来事を表わしているのではなく、特定の時間から切り離されて潜在的に存在する実現の可能性を表わしているのである。よって、＜恒常的内在型可能＞は、述語動詞のテンスに関わらず、《潜在可能》の意味を持つと考えられる。

4.2＜条件型可能＞

＜恒常的内在型可能＞の場合、実現の可能性は常に主題の位置に立つ対象に備わっていてそれを裏付ける要素が構造上現れないのに対し、＜条件型可能＞は文中に与えられる条件に実現の可能性が依存している点で＜恒常的内在型可能＞とは異なる。基本的に主従関係にある複文の構造か、それに準ずる構造をとる。ある条件のもとで、動作主の期待する、もしくは意図して努める事態の実現が可能・不可能である・あった（実現する・しない：実現した・しなかった）ことを言い表す。事態実現を左右する条

件は、その生起との関わりと主節の述語動詞に表されるテンスによって、さらに次のように分けられる。

【表 2】

動詞のテンス 可能のタイプ	現在の形	例数	過去の形	例数
<条件型可能>	(A) 前提条件	133	前提条件	12
	(B) 未定条件	136	(C) 反事実の条件	15 ¹²
	(D) 既定条件	520	既定条件	546
合計	—	789 ¹³	—	573

4.2.1 前提条件

ある事態を実現するための条件が、それ自体の生起は問題にせず、単なる前提として差し出されるタイプである。基本的に、従属節と主節が「条件—帰結」の関係を成していて、条件となる事柄は「-スレバ/スルト (-シナケレバ/シナイト)」を伴う条件節の形で現れる複文構造が多い。これは条件形式「-バ」と「-ト」が繰り返し起こる事態や必然的関係を成す事態に用いられやすいからであろう。

- (10) 「小説家は一メートル四方のすわる場所と、机がわりの木の箱でもあれば、小説がかけるのだ。仕事ができるのだ」 (ブンとブン)
- (11) 「コジュケイは遅いからね。あれは助走するスペースがないと、飛び上れないのよねえ」 (太郎物語)
- (12) 当時はお金さえ払えば、誰でも銃が買えた。(作例)

ある条件を前提として成立する事態の実現可能性を表わすだけで、その事態が実際に実現するか否か（実現したか否か）は特に問題にならない。「自然の法則」（「夏になれば、海で泳げる」類）や「社会の法則」（「外国人は再入国の許可をもらわないと日本に戻れない」類）として捉えられる可能表現もここに属する。

一方、奥田（1996：139）は、「保釈になれば、家に帰れる」のように「社会の法則」を表わす可能表現を「規範可能」として扱っている。奥田は、「規範可能」について、「社会的な規範によって条件づけられていて、

¹² 述語動詞が現在の形を用いる反事実条件文も1例あった。

¹³ 現在の形を用いる反事実条件文の1例を含めると790例になる。

規範の観点から見て、ある活動、ある動作は許されるか、許されないかの評価をうけとる。(中略) その活動、動作は決まって時間・空間的なありか限定がかけていて、そのことが活動、動作にポテンシャルな、一般的な性格を与えている」とし、肯定の形は「してもいい」に、否定の形は「してはいけない」、「してはならない」に置き換えられると述べている。

「前提条件」において、8割以上が一般的な事態を表わし、動作主は一般化されたり、不特定者で構文上消去されたりするが、次のように動作主が話し手を含んだ特定者である場合は動作主の恒常的な性質として捉えられる習慣や性格が表現される。

- (13) 未熟であること、孤独であることの認識はまだまだ浅い。何を書きたいのだろうか？家族と共に生活していると、何も考えずにいても楽しく過せるのだ。けれども、母は、父は、昌之は、ヒロ子ちゃんは、どれだけ私を知っているのでしょうか、どのような事で悩んでいるのか、何をやりたがっているのか知っているのでしょうか。(二十歳の原点)
- (14) 下書きをして清書をする。さらにそこへ筆を入れ、もう一度清書しなければ原稿の体をなさなかった。別に名文を書こうとしていたわけではない。そうでもしなければ意味の通じる文章を書けなかったのだ。(一瞬の夏)

用例(13)、(14)のように、特定動作主の恒常的な性質を表わす場合も、一般的な事態を表わす文と同様に前提となる条件の生起は問題にならず、単に後件が成り立つための必要な要素として差し出される。つまり、前提条件文は動作主の有無や人称がどうであれ、個別・具体的な時間性に欠けていると言える。

以上のように、<条件型可能>の「前提条件」は、述語動詞のテンスに関係なく、単なる実現の可能性だけを表現することから、《潜在可能》の意味を持つと考えられる。

4.2.2 未定条件

<条件型可能>の可能表現の中で、その条件となる事柄がまだ起こっていないタイプを指す。「前提条件」の動作主は、一般化されたり、不特定者で構文上消去されたりすることが多いのに対し、「未定条件」の動作主は通常話し手本人であるか、特定できる誰かである。未生起の事柄によって条

件づけられるタイプとはいえ、「前提条件」に比べると、より具体的で個別化された事態を捉えている。例えば、「高い車はお金さえあれば誰でも買える」といった「前提条件文」と、「(私は) 後 10 万円があれば車を買える」といった「未定条件文」を比べると、後者の方がより具体的でアクチュアルな事態を表わしていることがわかる。

つまり、事態実現に結びつく条件の生起が問題にならない「前提条件文」より、未生起の条件ではあるが、特定動作主にとって条件の生起が具体的に期待できる「未定条件文」の方がより個別化されたアクチュアルな事態を表わすと言えよう。

- (15) しかし、ジムのソファに坐り、茫然と外に眼をやっていると、
この無為な時間がたまらなく貴重なものに思えてくる。あるいは、
この無為の時間をくぐり抜けると、以前の自在な自分に戻れるの
かもしれない……。 (一瞬の夏)
- (16) 志方は少しためらったが、すぐ意を決したように言った。
「出来ればお金を貯めておいて欲しいのです」
「私が？」
「ええ、お金さえもう少しあれば開拓はもっと楽に進めることが
できます。鍬や鋸ももっといいものを買えます。米も食べられます。夜、火を灯すことも
できます」 (花埋み)

このように、「未定条件文」は、条件として差し出される前件の生起が未定であるため、後件の事柄の成立もまだ確定はできないが、動作主にとって具体的に期待できる事態を捉えていることから、ある程度事態の実現が想定できるタイプと言える。このことは、特定動作主の期待する事態が個別の出来事として近未来に関わる場合、より明確になる。次の用例は、時を表わす副詞的成分（もうじき、五時半）が未定条件となっていて、動作主の事態実現への重要な役割を果たしている。

- (17) 「ああ君か。君はもうじき退院できるよ。ぼくが、オーソリティ
が保証するのだから大丈夫だ」(楡家の人びと)
- (18) 私は青山にあるオールナイト営業のスーパーマーケットの場所
を教えた。「そこの中にあるコーヒー・スタンドで待っててくれ。
五時半までには着けるから」(世界の終わり)

このように、時間の具体化が進むほど（もうじき→五時半）よりアクチュアルな事態となり、現実界における実現度も高まっていく。つまり、未生起の事態ではあるが、個別化された出来事が未来の具体的な時間に関わっていると、実現の可能性が顕在的に表れるようになり、より実現の意味に近づいていく¹⁴のである。よって、個別の出来事が具体的な未来時に関わる未定条件文は意味的に《潜在可能》から《実現可能》へ移行していくタイプとして捉えられる。

以上のことから考えると、《潜在可能》から《実現可能》へ移行するタイプの文は、本来《潜在可能》の意味を持つ文が、時を表わす副詞的成分を伴う（それが事態実現を左右する条件として差し出される）ことで、実現の可能性がより顕在的に表れるようになり、《実現可能》の意味を帯びるようになると捉えられる。

一方、主節の述語動詞が過去の形をしている〈条件型可能〉の文は、通常これからの可能性として起こり得る事柄（条件）を表わすことができないために、「未定条件」は存在しない。たとえ文中に現れたとしても、現実と反する事態の可能性を想定して、それに対応する仮定的な条件を作り上げる「反事実仮定」としか捉えることができない。

4.2.3 反事実条件

このタイプの動作主は基本的に話し手を含む特定者である。発話時において既に起こった事態の結果が、動作主（もしくは話し手）にとって望ましくない、もしくは残念でならないという気持ちからその事実と反する事態の可能性を想定して、それに対応する仮定的な条件を作り上げているタイプである¹⁵。その仮定的な条件は、主に条件節の形をとって当該文に差し出される。述語動詞に「はずだ」「ちがいない」などの確信のムード形式や、「でしょう」「かもしれない」などの推量のムード形式を伴う。

(19) 五郎さえいなかったら、私はこのめぐまれた環境のなかで、留

¹⁴ 鈴木（1972:278）は、「潜在的なものの顕在的なものへの転化を表わし、この用法は動作動詞の基本的な用法と変わらない」とし、奥田（1986:206）は、「具体的な動作・状態が未来に関わっている時には、／可能／と／実現／とがひとつにとけあっているようである」としている。また、渋谷（1993:24）は、「未来時の実現に関する実現系可能は、潜在系可能との区別があいまいになる」と捉えている。

¹⁵ 小矢野（1979:88）は、このような用法について、「実際上は（現在の事実に対する：引用者注）反対の実現を含意しているが、表面的に解釈すれば、反実仮想という条件のもとで可能性の実現を表わすものである」と説明している。

学生活を平和にすべり出せたにちがいない。(驢馬)

- (20)「今度の事件は完全に私のミスでしたよ。地主の反対もあって、あなたの計画をそのまま実行するわけにはいかなかったが、それでもあれを聞いていたらもう少し何とか手の打ちようを考えられたでしょう」(パニック)
- (21)「どうして最初にそれをすっかり教えてくれなかったんだ？そうすればこんな馬鹿気たところにわざわざ来る必要もなかったし、時間だって節約できた」(世界の終わり)

このタイプは、現実界における出来事が動作主（もしくは話し手）にとって好ましいこともあろうと考えられるが、実例からは安堵の気持ちで作る上げる反事実の条件文（「太郎が生きていたら、彼女とは結婚できなかったはずだ」類）は見当たらなかった。述語動詞のテンスは過去の形に偏る（過去の形 15 例，現在の形 1 例¹⁶）。

「反事実条件」は、動作主にとってどうすることもできない現実の出来事に反する条件を仮想して作り上げ、動作主の期待する事態実現の可能性を捉える可能表現である。つまり、「反事実条件」は、あくまでも話し手が現在に既に起こっている事実¹⁶に反する事態生起の可能性を想定しているだけで、アクチュアルな事態として具体的な時間に位置付けられるものではない。よって、＜条件型可能＞の「反事実の条件」は、特定の時間から切り離されて潜在的に存在する実現の可能性を表わす《潜在可能》の意味を持つと捉えられる。

4.2.4 既定条件

何らかの既事実に条件づけられているタイプである。他の＜条件型可能＞は条件句や節の中に事態実現の条件となる事柄を伴う「条件－帰結」といった複文の構造が一般的であるのに対し、「既定条件」の文は理由句や節の中に条件となる事柄が現れる「原因－結果」の因果関係を成す複文の構造をとる。文中に差し出される条件の継続性を基準に考えると、大きく「恒常的な事柄」「一時的な事柄」「個別一回的な事柄」に分けられる。

① 恒常的な事柄

¹⁶ 現在の形を用いて、現在の事実に反する仮定として動作主の期待する事態が表現されることもある。「ああ、せめて僕が奈良県に生れてたらなあ。もしかしたら国体に出られるんだけどなあ」(太郎物語)

事態実現の可能性が既事実依存している可能表現で、基本的に主題の位置にたつ人やモノの恒常的な性質や動作主を取り巻く状況が事態実現を左右する条件として構文上に現れる。

- (22) ぼくは貧しいので子供に高価な画材を買ってやれない。
(裸の王様)
- (23) 賞与式には欠くべからざる喉をきかせるおじさんが、いつもにこにこ彼女を迎えてくれる。同じように小柄なおばさんも優しくお茶を入れてくれたりする。ここは言ってみれば天国のようなものであった。青雲堂は帳面になっていたから、なんでも無代で買えるのだ。(楡家の人びと)
- (24) 当時は受験日が別々になっていたから、彼女にふさわしく何回でも受験できたのである。(楡家の人びと)

用例(22)、(23)のように、主題に立つ人やモノの「特性」が事態実現を左右する条件として働く場合、文の表わす意味は主題に立つ事態参与者の恒常的な性質を表わす。これは意味上において<恒常的内在型可能>と重なるところである。しかし、文構造において<恒常的内在型可能>は、実現の可能性が主題化される対象に恒常的に備わっているだけで、それを裏付ける他の要素は文中に(構造上)現れない(「花子はロシア語ができる」)のに対し、このタイプの文は主題化される対象の特性が構造上に現れて事態実現を左右する条件となる(「花子はロシア生まれだからロシア語ができる」)点が大きく異なる。つまり、文の表わす意味は似ていても、文の構造的な特徴が異なる。このように、<条件型可能>の「既定条件」において、事態実現の可能性が「恒常的な事柄」に依存している可能表現は、現実界における個別一回的な出来事ではなく、潜在的に存在する実現の可能性を捉えている点から<<潜在可能>>の意味を持つと言えよう。

② 一時的な事柄

通常、同一主体＝動作主の異なる時間帯における状態や状況を比べる時に用いられる。動作主は話し手本人を含む特定者で、一定の時間に限られる動作主の気分的・肉体的状態や置かれた状況により、動作主の期待する、もしくは意図し努める事態の実現が一時的に可能・不可能である・あったことを言い表す。時を表わす副詞成分を伴うことで、動作主の異なる時間帯における一時的な状態や状況であることが明らかとなる。

- (25) 「柳はなんと言っているんです」
「三日前にスパーリングをしていて鼓膜を破ってしまったと言
うんだ。だからできないと……」(一瞬の夏)
- (26) 「風呂へ入れよ。それから飯にしよう。(今日は:著者補足)親爺が
いないから、三人でのんびり食える」(太郎物語)
- (27) 初めの一カ月は貯えもなく、米を買うにも一升ずつしか買えな
かった。(花埋み)

ある一定の時間を伴い、その時の動作主の一時的な状態や状況が事態実現を左右する条件として働いていることから、「恒常的な事柄」に比べてより個別的で具体的な事態を表現するタイプと言える。文の表わす事態がある一定の時間に限定されることで、事態実現の可能性がよりアクチュアルに描かれるようになり、実現の意味に近づいていく。つまり、動作主が特定され、時間の具体化が進むほど文の表わす事態はよりアクチュアルな出来事を描くようになり、実現の意味が表れやすくなるのである。

このように、事態実現の可能性が「一時的な事柄」に依存している<条件型可能>の既定条件文は、実現の意味が顕在的に表れていることから、<<潜在可能>>から<<実現可能>>へ移行していくタイプとして位置付けられる。

③ 個別一回的な事柄

事態実現の可能性が「個別一回的な事柄」に依存している可能表現で、基本的に発話時や物語世界内の出来事時を設定時とする特定の時間に関係づけられる。ここまで見てきた可能表現と違って、時間とは切り離せない関係にある。通常動作主は話し手本人で、3人称でも1人称に準じるもの(小説の地の文における感情移入など)である。

- (28) カーテンを閉め、横になったが眼が冴えてどうしても眠れない。
(一瞬の夏)
- (29) 槌の音がより激しくなり、黒人兵は叫びたてると、背後から僕の喉を巨きい掌で掴んだ。僕の喉の柔かい皮膚に黒人兵の爪が食いこみ痛かったし、喉ぼとけが圧迫されて呼吸ができない。
(飼育)
- (30) 「こんどのことは、あんたには上出来じゃったの。」

母がいった。私はうれしく、「うん。」と素直に首肯できた。

(忍ぶ川)

- (31) 熱の残ったナイフの鋭利な刃先が、私の下腹部に軽く食いこみ、それが定規で線を引くみたいに右に走った。私は一瞬腹を引こうとしたが、大男に背中をブロックされていたせいで、ぴくりとも動けなかった。(世界の終わり)

このタイプは、過去の形を述語にする文が「実現」と「非実現」のどちらの用法にも用いられるのに対し、述語動詞が現在の形である場合、「非実現」の用法に偏っている¹⁷ことが特徴的である。これはおそらく本来可能表現が動作主の事態実現への期待を表わすものであるため、動作主の期待通り、もしくは意図して努めた通りに実現する場合は、その結果が重んじられることで実現の意味が明確に表れる過去の形(完了)を用いてしまうからであろう。

例えば、このタイプの否定文は「調子が悪くて早く走れない」と現在の形で述べても、それに対応する肯定文は「調子がいいから早く走れた」のように通常過去の形(完了)で述べられる。もし、「調子がいいから早く走れる」のように現在の形にすると、個別的な意味はなくなり、潜在的に存在する実現の可能性を表わすようになってしまう。そこで、「実現」の意味を表わすためには、「調子がいいから早く走れている」のように、発話行為時にアクチュアルに関係づけられる「V-テイル」形式(継続相アスペクト)を用いる必要が生じる。このような点から考えると、可能表現の意味が述語に表されるテンスの形と深く関わっていることは確かである。

以上のように、<条件型可能>の「既定条件」において、条件が「個別一回的な事柄」である文は、述語動詞のテンスによる用法の違いは見られるが、いずれの場合も現実界において動作主が事態実現を試みた個別的な出来事を描いている点で共通している。よって、このタイプの文は時間とは切り離せない関係にある《実現可能》の意味を持つと考えられる。

4.3 <条件不問型可能>

実現の可能性がどこにあるのかは特に問題にならず、動作主の期待や意図に応じる、またはそれに反する結果のみが差し出される可能表現である。事態実現の可能性が文中に現れないため、なぜ実現したのか、もしくはし

¹⁷ 現在の形を述語にする《実現可能》の意味を持つ可能表現 170 例のうち、「実現」の意味を表わすのは、5 例しかなかった。

なかったのかを判断すること自体が難しい。「結局、とにかく、どうやら、なんとか、やっと、よく」などの副詞成分と共起して現れることが多いが、これは完結性を持つ副詞成分に事態の結果に焦点を向けさせる働きがあるからであろう。動作主は話し手本人で文中に現れないことが多いが、動作主が3人称である場合は、誰にとっての結果なのかを示すため動作主が明示される。

(32) とにかく、五月さんと一緒に花吹雪の中を歩けた！(太郎物語)

(33) それでも峻一はどうやら医学部を卒業し、慶応精神科の医局には入れた。(楡家の人びと)

(34) 「ニクソンがマリファナを嚴重に取り締ろうとして、大学の医学部教授や有名な医者を集めて調査委員会を作ったんだけど、結局は有害を示す証拠は何も得られなかったんだから。ニクソンたらがっかりしてその委員会を解散しちゃったわ」

(若き数学者のアメリカ)

(35) もっとも、家へ帰る途中にかかっているあの橋は、あのように幅の広い大きな橋ですし、欄干も頑丈にできている上に、壊れた部分も見あたらず、わたしにはとても妻が川に落ちたなど考えられなかったのですが、わたしにしろ村の者にしろ他に心あたりが何もないのですからしかたがありません。ずいぶん下流の方まで捜したのですが、妻の姿は発見できませんでした。

(エディプスの恋人)

渋谷(1993:29)は、このように事態実現の結果だけを差し出す可能表現を「結果可能」とし、「実現系可能には、条件を無視して単に実現の有無(結果)だけを問題にする用法がある」と述べている。また、可能の条件と動作の実現の対応関係が新たに発生した場合などがその典型であるとし、「(鉄棒で、今までできなかったわざをはじめて成功させて)できた！」(渋谷の(21))の例を挙げている。

動作実行の結果のみを表わす可能表現であることから、通常述語動詞のテンスは過去の形に限られる。「パソコンは問題なく使えている」のようにアスペクト形式「V-テイル」形を用いて、結果継続を表わす例も考えられるが、今回の調査では見当たらなかった。また、現在の形を述語とする可能表現にも、なぜ動作主の期待する事態が実現しないのかが明示されず、単に非実現の結果のみが差し出されることがあるが、その場合、文脈から

発話時に限られる動作主の「能力の欠如」（「本当にもう飲めない」類）が事態実現を左右する条件であることが明らかに表れるため、「既定条件」の「個別一回的な事柄」に属すると考える。

＜条件不問型可能＞は、動作主が実際に事態実現を試みた結果を言い表す可能表現で、時間とは切り離せない個別一回的な出来事を捉えている点から、《実現可能》の意味を持つと捉えられる。

4.4 本節のまとめ

本節では、まず「実現可能性の在り処」を問うことで可能動詞を述語とする可能表現の意味・構造的な類型を探り、それらがどのような構造的な特徴によって支えられているか、またどのような《可能》の意味を表わすかについて考察した。次の表は、上述した可能表現のタイプと文の表わす意味がどう関わっているかを明らかにするため、例数を挙げたものである。

【表1】の全体用例 2905 例のうち、「判断不明」の 72 例と「その他」の 846 例を除いた 1982 例を、「実現可能性の在り処」を基準にタイプ分けし、各タイプがどのような《可能》の意味を表わすかを検討したものである。

【】内は【表1】で、「2つの《可能》の境界例」として挙げているもので、《潜在可能》から《実現可能》へ移行していくタイプの例数である。

【表3】可能表現のタイプと用法の割合（括弧内はパーセンテージ）

可能表現のタイプ	全用例数	用法	肯定と否定	現在の形	過去の形
＜恒常的内在型可能＞	553 (27.9)	潜在可能	可能	232	22
			不可能	269	30
＜条件型可能＞ ¹⁸	1362 (68.7)	潜在可能	可能	317【69】	51【19】
			不可能	302【49】	40【12】
		実現可能	実現	5	115
			非実現	165	367
＜条件不問型可能＞	67 (3.4)	実現可能	実現		44
			非実現		23
合計	1982 (100)			1290	692

この【表3】からもわかるように、＜恒常的内在型可能＞は、述語動詞のテンスの形がどうであれ《潜在可能》の意味を持ち、＜条件不問型可能

¹⁸ ＜条件型可能＞は、「前提条件」「未定条件」「反事実条件」「既定条件」に下位分類できるが、ここではタイプ別に例数を挙げず、全体例数を示す。

>は、過去の形を述語にする可能表現で《実現可能》の意味を持つと捉えられる。<条件型可能>は、実現の可能性がどのような条件に依存するかによって、大きく《潜在可能》と《実現可能》に分かれるが、本来《潜在可能》の意味を持つ文が、《実現可能》の意味を帯びるようになる用例（【】内のもの）もある。また、<条件型可能>の述語動詞が現在の形で《実現可能》を表わす場合は、「非実現」の意味に偏ることが指摘できる。

以上、ここまで見てきた4節の内容を簡単にまとめると、次のようである。

- ①<条件型可能>は、条件とその生起との関わりで大きく四つのタイプ（「前提条件」「未定条件」「反事実条件」「既定条件」）に分けられるが、文中に差し出される条件と時間性の関わりによって、《潜在可能》《実現可能》、または二種類の可能表現の移行関係を表わすタイプが存在する。
- ②<条件型可能>の「未定条件」において、個別の出来事が具体的な未来時に関わる文（「今行けば5時の電車に乗れる」）と、「既定条件」において事態実現を左右する条件が一時的な事柄に依存している文（「今は足を怪我して歩けない」）は、《潜在可能》から《実現可能》へ移行するタイプとして捉えられる。
- ③《潜在可能》から《実現可能》へ移行するタイプの文は、本来《潜在可能》の意味を持つ文が時を表わす副詞的成分を伴うことで、時間の具体化が進み、実現の可能性が顕在的に表れるようになる。つまり、時間の具体化が進むことで現実界における実現度が高まり、《実現可能》の意味に近づいていくのである。
- ④可能動詞を述語とする可能表現で、《実現可能》の意味を持つのは、基本的に<条件型可能>の「既定条件」で、条件が「個別一回的な事柄」である文（ただし、述語動詞が現在の形である場合は「非実現」の用法に偏る）と、<条件不問型可能>に限られる。
- ⑤動作主が特定され、時間の具体化が進むほど文の表わす事態はよりアクチュアルな出来事を描くようになり、《実現可能》の意味が表れやすくなる。

5. 結論

本稿では、可能動詞を述語とする可能表現の意味がきれいに《潜在可能》と《実現可能》という二種類の可能表現に分けられるのではなく、《潜

在可能」から「実現可能」への移行関係を表わすタイプが存在することを指摘し、どのような構造的な特徴のもとで二種類の可能表現の意味が表れやすくなり、移行していくかを明らかにした。また、可能動詞を述語とする可能表現の意味と述語に表わされるテンスの形との結びつきは否定できないが、可能表現の意味は「文の表わす事態や時間性との関わり」により方向付けられるもので、それは述語動詞のテンスの形のみならず、文全体の構造により支えられていることを明確にした。

本稿の学術的な意義は、可能動詞を述語とする可能表現は「文の表わす事態や時間性との関わり」により「可能」の意味の違いが生じるということの規定したことと、どのような構造的な特徴のもとで「潜在可能」と「実現可能」という二種類の可能表現の意味が表れやすくなり、移行していくかを明らかにしたことにある。

<参考文献>

- 奥田靖雄 (1986) 「現実・可能・必然 (上)」『ことばの科学 1』むぎ書房, pp. 181-212.
- (1996) 「現実・可能・必然(中)」『ことばの科学 5』むぎ書房, pp. 137-173.
- 尾上圭介 (1998) 「文法を考える 6 出来文 (2)」『日本語学』17 卷 10 号, pp. 90-97.
- (1999) 「文法を考える 7 出来文 (3)」『日本語学』18 卷 1 号, pp. 86-93.
- 小矢野哲夫 (1979) 「現代日本語可能表現の意味用法 (1)」『大阪外国語大学報』45, pp. 83-97.
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33 卷第 1 冊.
- 鈴木重幸 (1972) 『文法と文法指導』むぎ書房.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版.

<用例出典>

『新潮文庫の 100 冊 CD-ROM 版』をテキスト化したもののうち、昭和生まれ作家の昭和戦後の 20 作品 (『新源氏物語』と方言を用いている野坂昭如の作品を除いたもの) .

A Review concerning the Meaning Classification of
Possibility Expressions
—Based on the Point of Realizability—

Abstract

In this review, I classified the semantic/structural types of possibility expressions that possible verbs are used as predicates, based on “the point of realizability”. And then, I identified the syntactical features that supported the types, and reviewed what each type expresses the meaning of possibility. I discovered that the meaning of possibility expression sentences cannot be clearly divided into < potential possibility > and < actual possibility >, but that there are types that show the transition from the former to the latter. In addition, I analyzed under what structural features the meaning of < potential/actual > possibility expressions tend to appear, and how the transition between two types takes place. Moreover, we cannot deny the linkage between the meaning of possibility expressions and the form of tense that the predicate shows, but, I concluded that the meaning of possibility expressions is directed by the relation between the situation and timeliness that a sentence expresses.

受領日 2011年2月25日

受理日 2011年5月23日